

## 私の戦争体験

大牟田市 上野 喜代子

「父ちゃんがやられた。弾の来ない方向に行くけん」。母はそうひとこと言って、乳母車に父を載せて走り去った。私達子供達は、バラバラ、シュッシュッという弾の散り落ちる中を、近所の方々と共に防空ごうの中で息をひそめてB29の去るのを待った。

大牟田の第2回目の空襲で、大牟田南地区もかなりやられてしまった。学校も、近所も、同級生の女の子も、真黒い小石のようなコリコリした固まりのようになって、焼けた家の下から出て来た。

父44才、母42才、姉18才、兄14才、私11才、弟6才、私の一家である。でも今考えると、弱々しくなかった。強かった。逆に心が張りつめていたような気がする。そして泣いてはいられなかった。

空襲が終って朝の空はきれいであった。近所の若い衆が父を戸板に寝かせて4人で三川町四丁目の木下外科へ運んで下さったが、膝は立てるのに右の足首は折れていた状態であった。右足首に焼痕弾の破片が当たって怪我したのであった。近所の消防署わきに立っていた父が怪我したと思われるところに、1mの焼痕弾が落ちていた。木下外科でも手の施しようもなく仮病室に設置された駛馬南小学校講堂に運ばれた。広い講堂にはもう火傷等で負傷した老若男女、中にはもう精根もなく、身体全体を焼かれ、油紙を身体にまとった人が行き来してるのをみるのは、現代では想像できない有り様で、「あの男の人は明日死なすばい」という言葉を聞いた。本当にもう翌日にはその姿を見ることはなかった。

広い講堂には横たわった火傷人がいっぱい、まわりに家族の人が付きそって、となり同志なぐさめ合っていた。私も幼稚園児の弟と船津町一丁目より駛馬の間を行ったり来たりした。父の足首の傷口からは、夏の事でもあり、白いうじ虫がおよおよと出て来るのである。私はそれを箸で皿にとっては捨てた。生きた人間の傷口から白いうじ虫がおよおよと。清潔である筈もない。蚊がいる、蠅もいる。消毒もない、病室というより、よりあい広場であった。

父に手術がめぐって来た。もうばい菌が膝まで来てるので、膝上よりの切断ということだったが、心臓が弱かったので一応中止とのことで中止。大工の父は手が器用だったので、「さあ、下駄を作るよ…」と悲しい言葉さえ出さなかった。一番心配したのは母であったろう。そして二度目のチャンス到来、二度目の切断が来た。空は青く晴れていた。8月4日、何故かその日の心の焦り、弟をけしかけて仮病室の手術場へと急いだ。父の足は膝より切り離されて横にあった。そして父は息をひき取った。麻酔薬も使用されなくて。どんなにその痛みを想像しても想像できない。その手術の痛みを…。父が怪我しても弱気な言葉を聞いたことはなかった。母と父は何を語り合っていたのであろうか。母からもその時のことを聞いたことがなかった。唯一、死に間際に、「輝代18才、雅敏14才、喜代子11才、雅宣6才」と語って息を引き取

った…と。きっと父は残してゆく4人の子供の事と、苦勞するであろう妻なる母の事を気づか  
つての淋しい気持のあらわれであったろう。

父の遺体は自分達で焼かねばならなかった。延命公園東側の葬祭場も空襲で焼失していたの  
で、木々を組み合わせてトタンの上で焼いた。それから10日後、昭和20年8月15日の終  
戦となった。

それから母の苦勞が始まるのである。金もなく食糧も乏しい中から、母は三池港務所の女仲  
仕としての男並みの苦勞が始まった。小学校から上級学校に上がろうとした時に、農家の子な  
るが故にと反対された。田舎の農業に従事するばかりの貧しい農家の娘が上級学校に進むのは  
無理な事か。今からは世の中はますます発展していくのに学校に行けないなんて…と幾日泣い  
たことか。よーし、我が子ができたら寝なしでも働いてやってみせるぞ…と、小さいなりに思  
った。だからどうにでもなる、行きたいところまで行け、母の口ぐせはいつもそうだった。で  
も終戦のあの乏しい時代、誰もが苦勞した時代、質屋通いもした時代、こんな話をしてくれた。

雷さんの話をしてた時に、質屋にはせめて利子だけは入れないと質種が流される。利子を納  
めに行こうと夕方大雨の中を家を出る。途中大きな雷がゴロゴロなる。ところが、ピカッと音  
がしたので、いきなり目、耳をおおった。目をあけると一面まっくらやみ、あ…目が見えなく  
なると一瞬思った。あたり一面の電気が切れてたのだった…。わらい話ではあるが…と。そ  
こで人の信用の大切さを学んだと話してくれた。

現代のようないい加減な時代ではなく、夫亡人なるがゆえの世の荒波、その後、質屋さんか  
らは絶大なる信用を受けて質種なしでも充分お金を貸して下さった事、その利子がかかさず入  
れていた事、人の信用の充実さというものを私にしかと悟らせた言葉を身にしみて話してくれ  
た。そのかわりに質札がいっぱい私のタンスにあったな…と思い出す。その信用の大切さとひ  
きかえに。

戦災死者のために一生懸命運動した母も来年は七回忌を迎える。その運動のむくいもなく、  
戦争未亡人との雲泥の差の中で生きて来た母、このような人達がどんなに多くおられて苦勞さ  
れたことか。